宮沢賢治「ビヂテリアン大祭」論（一）
―その宗教性に触れつつ―

金　戸　清　高

A study of Kenji Miyazawa's "Vegetarian Festival" (part 1)

Kiyotaka Kaneto

1

「ビヂテリアン大祭」は賢治の生前未発表童話である。[1] 諸家の研究によれば1923年（大正12年）頃の執筆と推定されている。[2]「賢治の生命観、人生観、宗教観を知る重要な手掛かりになる作品であるとおもわれるのにあまり取りあげられていない」[3]、「賢治が菜食主義に求めた」「生物が他の生命を食べて生きるという原罪への罪意識」への「解決策の一つ」[4]、「ここに盛られた思想が二十世紀の人間文明に警鐘を鳴らし、二十一世紀への示唆を含む」[5] 等と語られる一方、「この作品には感銘しない。何だか菜食主義反対派の論の方に理論的には納得がゆき、読後妙な気分になってしまう」[6]「〈私〉はビジテリアン大祭には出席したものの、その内容にはずいぶんと不満だったのではないか」[7] とも評される。特に結末の「どんでん返し」について島村輝氏は以下のように指摘する。

> それまでの議論への関わりが真剣であればあるほど、それは単なる「余興」としてすますことのできない、いわば参加者への「裏切り」行為である。そのことが「私」には〈ぼんやり〉するほどの強い違和感として感じとれたに違いない。〈略〉それはビヂテリアンの実践そのものに対する疑問、無力感、挫折感を背後に秘めているという意味で、ビヂテリアンとしての「私」にとって致命的な不信であるといえるだろう。[8]

氏の指摘の通り、この童話には「妙な気分」、「強い違和感」を抱かせる結末である。ちょうど志賀直哉が芥川のいくつかの小説に感じた「仕舞で読者に背負投げを食はすやうな」感覚にもつながるようだ。ただし賢治には「作者の腹にははつきりある事を何時までも読者に隠し、釣つて行く」[9] したたかさはなかったに違いない。物語の以下の結末部がそのことを明示している。

> 「やられたな、すっかりやられた。」陳氏は笑ひころげ哄笑歓呼拍手は祭場も破れるばかりでした。けれども私はあんまりこのあっけなさにぼんやりしてしまひました。<u>あんまりぼんやりしましたので愉快なビヂテリアン大祭の幻想はもうこわれました</u>。どうかあとの所はみな

さんで活動写真のおしまゐのありふれた舞踏か何かを使ってご勝手にご完成をねがふしだいであります。（傍線引用者、以下同）

「私」の大祭への幻滅感、失望感が窺える結末部である。「私」には担がれたことを他の出席者のようにジョークとして笑いとばす余裕はない。そしてその失望感はまた読者のものでもある。謂わば「私」は、読者とともに「幻想」をこわされてしまったのである。ただし「私」と作者宮沢賢治は同一ではない。仏教徒でベジタリアンであることから、ともすれば「私」イコール賢治と考えがちだが、「私」は、作者宮沢賢治と相当の距離がある。例えば村瀬学氏は次のように指摘する。

つまり「生きる」ということは、そういう「他の生」を「自分の生」に転化する（その逆もしかり）すじ道に入ることだったのである。／ところが賢治〈略〉は、このすじ道を肯定しない。その理由は、生き物を殺してはいけない、殺すのは「悪いこと」だというふうに考える「思想」をもっていたからである。〈略〉自分は殺さない、自分は罪を犯さない、そこに「潔白(イノセンス)」という観念が生まれる。自分は「白」だという観念である。こういう観念の、一見した美しさとは裏腹に、この観念の中味に一歩立ち入れば、どこかで何かを「黒」と決めつける、鋭い排他性の観念がひそんでいるのに気がつくのである。〈略〉むろん賢治自身は、自分のそういう「傾向」をよく感じていたのだと思う。それだからこそ、彼は逆に増々「みんなの幸い」のことを考え、みんなと「共生」できる世界のイメージを追求していたのだという気がする。[10]

村瀬氏によればこの論文が発表された頃に報道された二つの事件乃至社会現象を例にあげて指摘する。則ち、「外に出たら、アリさんをふんづけてしまうから」と、どうしても外で遊ばなくなった幼稚園児がいたという件、もう一つは汚れのひどい物とそうでないものとが同時に別々に洗える洗濯機が飛ぶように売れた件である。消費者の多くは、父親の下着を別に洗うためだったという。賢治はこうしたベジタリアンの思想が肉食を〈悪〉とする「排他性」をもつことを自覚しているのである。そのことは以下の保阪嘉内宛の有名な書簡にも明らかであろう。

私はしかしこの間、からだが無暗に軽く又ひつそりとした様に思ひます。私は春から生物のからだを食ふのをやめました。けれども先日「社会」と「連絡」を「とる」おまじなゐにまぐろのさしみを数切たべました。又茶碗むしをさじでかきまわしました。[11]

傍線部のように、「社会」「連絡」「とる」、とある。村瀬氏もこの書簡を引用しながら指摘しておられないが、なぜここでこれらの語が「」付きで書かれたか。これを引用の意味とするならば、書簡の宛先人である保阪嘉内と賢治との間には何か共通の符帳があるようだが、少なくともこの「」には、囲んだ言葉を強調する趣旨が窺える。賢治はこの頃「からだが無暗に軽く又ひっそりとした」と感じており、その理由は「春から生物のからだを食ふのをやめ」たからだという。「無暗に軽く又ひっそりとした」というのは文脈から判断して、賢治自身、それを良しとはしていないことが窺える。その打開策として「まぐろのさしみ」と「茶碗むし」を食べたのだというのであろう。それが「社会」と「連絡」を「とる」「おまじなゐ」ということである。無論これは肉食

の合理化ではない。つまり肉食を拒否することは賢治にとって、「社会」との隔絶につながることであって、その結果として自身の体が「無暗に軽く又ひっそりとした」のを自覚したのである。

ところでこの童話「ビヂテリアン大祭」が「私」の回想によって語られていることは留意されなければならない。かくも「大祭」への幻滅感を結末に示した「私」は、一体何のためにこの顛末を回想しなければならなかったのか。以下の物語前半の記述は、物語を語っている〈今〉の「私」が大祭の幻滅の後も「ビヂテリアン」であり続けていることを示している。

> この名前は横からひやかしにつけたのですが、大へんうまく要領を云ひあらはしてゐますから、かまはず私どもも使ふのです。／同情派と云ひますのは、私たちもその方でありますが、〈略〉第三は私たちもこの中でありますが、

そして今なお「ビヂテリアン」であり続ける「私」は、開催前に抱いた「愉快な」「幻想」をこわされながらも、一方で「ビヂテリアン大祭」の顛末を語らずにはいられない。「私」は何故語ったのか。物語の記述を追ってその動機を解明していきたい。

2

「ビヂテリアン大祭」執筆の動機は賢治の仏教信仰、特にその「殺生戒」からくるものと考えられるが、一方でこの物語のキリスト教的側面を指摘する論は多い。ただし、ここで先に結論を述べるなら、賢治の童話のキリスト教的側面というのは、名高い「銀河鉄道の夜」にしても、必ずしもキリスト教精神の伝えるものそのままではなく、いずれも〈宮沢賢治〉というフィルターを通して、微妙に変容して書かれる。その意味で賢治のキリスト教受容という問題は単に物語の記述に表れているから影響があったのだとかいうような短絡は留保されねばならない。

> ただベジタリアン(賢治はビヂテリアンと呼んだ)は、その仏教思想とは別の所で成立した。〈略〉またこの作品には、ビヂテリアン大祭「次第」に「挙祭挨拶」「論難反駁」「祭歌合唱」「祈祷」「閉式挨拶」「会食」「会員紹介」「余興」以上とあるが、これは賢治が盛岡在学中に出席したこともあったという、キリスト教の集会からヒントを得たのではあるまいか、〈略〉「ビヂテリアン大祭」が実在のニューファンドランド島で開かれたというのも故無しとしない。[12]

田口昭典氏の論である。また上田哲氏も同様に指摘している。

> ビジテリアン大祭の式場、式の模様はどことなくプロテスタント・キリスト教の雰囲気に似たものが感じられる。登場人物の祭司次長ウイリアム・タッピングの名は、彼が接した盛岡浸礼教会のヘンリー・タッピング、祭司長のデビスの名は、著名な宣教師で同志社創立に参画したJerome Davisなどからヒントを得たのではなかろうか。なお、〈トリニティの港〉のトリニティは三位一体の意味、〈中世の煩瑣哲学〉はスコラ哲学、〈クリスト教旧神学……〉、〈クリスト教神学〉などの用語や叙述の中にかなりなキリスト教についての知識のあったことがう

かがわれる。[13]

但し、両氏のように「大祭次第」からキリスト教的礼拝の要素を見いだすのは、実は不毛な論議ではないだろうか。所謂「式典学」（リタージ）なるものは、明治以降日本が欧米の礼拝形式から学んだ部分が大きく、例えばそれは憲法において宗教行為を禁じられた公立の学校の入学、卒業式のプログラムにおいてさえ例外に漏れない。それゆえここで、ことさら「大祭次第」だけがキリスト教の礼拝形式に沿っていると指摘することは出来ない。とはいえ両氏の指摘以外にも、「ビヂテリアン大祭」には「教会」「長老」「祭司長」「祭壇」「天」「異教徒」、「宣教師」「トラピスト」等、「ビヂテリアン同情派」は勿論キリスト者ではないにもかかわらず、物語の各所にキリスト教的用語が散らばっている。ここに挙げたもの以外でも「大祭」の中の「マットン博士」との論難反駁等はキリスト教的神学論争でもあるわけで、「ビヂテリアン大祭」にキリスト教的要素があることは疑いない。

それどころか、「ビヂテリアン大祭」というこの物語のタイトルから既に宗教的なのである。講談社『日本語大辞典』によれば、「大祭　①戦前の祭祀令、戦後は神社本庁の祭祀規定で定められた神社の重要な祭祀。祈年祭・新嘗祭・例祭・遷座祭など。②天皇が行う皇室の祭祀」である。つまり「大祭」という語は、元来は国家神道の用語であることが解る。無論賢治の中に「大祭」に神道的意味合いを込めるつもりはなかったであろう。私は始め、タイトルの「大祭」の英訳が‘carnival’ならば頗る興味深いと考えていた。‘carnival’と‘cannivalism’とは、語源的には同じであって、‘vegetarian’と‘carnival’という組み合わせがアイロニカルだという見通しがあったのだが、実際は賢治の念頭には‘festival’という語だったらしい。[14] しかし‘festival’も‘carnival’も意味的にはそれほどの違いははく、どちらも宗教的な祭典であることに違いはなさそうである。*C.O.D.* によれば‘festival’の語源‘feast’は‘Joyful religious anniversary’である。

あるいは物語の次の記述である。

> 私は昨年九月四日、ニュウファウンドランド島の小さな山村、ヒルティで行はれた、ビヂテリアン大祭に、日本の信者一同を代表して列席して参りました。〈略〉実は動物質のものを食べないといふ考のものの団結でありまして、日本では菜食主義者と訳しますが主義者といふよりは、も少し意味の強いことが多いのであります。菜食信者と訳したら、或は強すぎるかも知れませんが、主義者といふよりは、よく実際に適ってゐると思ひます。

「私」は「ビヂテリアン」を「主義者」よりはもっと強い意味を込めて「菜食信者」というように、宗教的意味合いを込めた術語として使おうとしているのである。ここからも「ビヂテリアン大祭」というタイトルの面白さ、妙とでもいうべきものを見ることが出来る。つまり「ビヂテリアン」という一種禁欲的な意味合いをもつ単語と「大祭」「festival」という快楽的な言葉の統合、言ってみればミスマッチの語が、大まじめに論争が展開するという物語の、題名として選ばれているということである。賢治はこの物語を書いたもくろみとして、これを一つのコメディに仕立て上げたかったのではないだろうか。物語の終盤に「ニュウヨーク座の」「喜劇役者」「ジョン、ヒルガード」を登場させたのもそのもくろみの一端と考えられるのである。

また次は物語中に明かされる「私」の立場、信条である。

同情派と云ひますのは、私たちもその方でありますが、恰度仏教の中でのやうに、あらゆる動物はみな生命を惜むこと、我々と少しも変りはない、それを一人が生きるために、ほかの動物の命を奪って食べるそれも一日に一つどころではなく百や千のこともある、これを何とも思はないでゐるのは全く我々の考が足らないのでよくよく喰べられる方になって考へて見ると、とてもかあいさうでそんなことはできないとかう云ふ思想であります。〈略〉第三は私たちもこの中でありますが、いくら物の命をとらない、自分ばかりさっぱりしてゐると云ったところで、実際にほかの動物が辛くては、何にもならない、結局はほかの動物がかあいさうだからたべないのだ、小さな小さなことまで、一一吟味して大へんな手数をしたり、ほかの人にまで迷惑をかけたり、そんなにまでしなくてもいゝ、もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらでも食べていゝ、そのかはりもしその一人が自分になった場合でも敢て避けないとかう云ふのです。けれどもそんな非常の場合は、実に実に少いから、ふだんはもちろん、なるべく植物をとり、動物を殺さないやうにしなければならない、くれぐれも自分一人気持ちをさっぱりすることにばかりかゝはって、大切の精神を忘れてはいけないと斯う云ふのであります。

「私」の属する宗派は「ビヂテリアン同情派」である。無論「私」の立場は作者賢治の宗教観、世界観の一端をあらわすものといえる。しかし、先に述べたように、「私」と「賢治」には少なからず距離がある、その「ずれ」のようなものを予感させるものとしてここに記述されているのである。特に「くれぐれも自分一人気持ちをさっぱりすることにばかりかゝはって、大切の精神をわすれてはいけない」は、先ほどの村瀬氏の指摘のように、「私」のいわば「潔白性」（イノセンス）が問われるところであろうし、「生きる」ことが本質的に他者の「生」を奪うことを容認することを意味するという問題につながってくるからである。また「みんなの幸い」を求めるなら、例えば肉食を習慣とする他者の生き方をどう容認するかという問題とも関わってくる。しかしこの引用部の文脈から窺える「大切の精神」とは、「自分が食べないからさっぱりしている」訳ではないことについては言及されているが、結論的には「やむを得なければ食べても良い」が自分が「食べられる」のも拒否しない、と自分たちの信条の説明という形で終わってしまっている。先の書簡に見られた、肉食の拒否が「社会」との隔絶を意味するという認識には、まだ遠い。

ここで参考までに「ビヂテリアン大祭」の改稿形「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」の「ビヂテリアン」のジャンル分けを引用しておく。

同情派（かあいさう）
予防派（からだにわるい）
大乗派（他の動物の敵なるをえらびたべる）
絶対派（けして何をもたべぬ）
折衷派（あっさりしたものはたべる）

この中には「ビヂテリアン大祭」の「私」の属する「ビヂテリアン同情派」は出てこない。その意味でも「ビヂテリアン大祭」と「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」とは、基本的には別々のものであり、どちらかを評価するのにもう一方をものさしにすることが出来ない性質のものと考えられる。

さて、「私」がなぜ日本の信者を代表して「ビヂテリアン大祭」に出席したのかという問題であるが、先に引用した物語の結末、「愉快なビヂテリアン大祭の幻想はもうこわれました」とあるこ

とから、「私」は当初、この大祭に「愉快な幻想」を抱いていたことが窺える。「私」は何らかの「幻想」、〈期待感〉をもってこの大祭に出席している訳で、ではそれは一体何だったのか、という疑問が起こり得よう。

> すべてこれらは、私たちの兄弟でありましたから、もう私たちは国と階級、職業とその名とをとはず、たゞ一つの大きなビヂテリアンの同朋として、「お早う、」と挨拶し「おめでたう、」と答へたのです。そして私たちは、いつかぞろぞろ列になってゐました。列になって教会の門を入ったのです。一昨日別段気にもとめなかった、小さなその門は、赤いいろの藻類と、暗緑の梅とで飾られて、すっかり立派に変ってゐました。門をはいると、すぐ受付があって私たちはみんな求められて会員証を示しました。これはいかにも偏狭なやり方のやうにどなたもお考へでせうが、実際今朝の反対宣伝のやうな訳で、どんなものがまぎれ込んで来て、何をするかもわからなかったのですから、全く仕方なかったのでありませう。

あるいはデビスを代弁したタッピング祭司次長の以下の挨拶である。

> 諸君　吾人は内外多数の迫害に耐えて、今日　ビヂテリアン同情派の主張を維持して来た。然もこれ未だ社会的に無力なる、各個人個人に於てである。然るに今日は既にビヂテリアン同情派の堅き結束を見、その光輝ある八面体の結晶とも云ふべきビヂテリアン大祭を、この清澄なるニュウファウンドランド島、九月の気圏の底に於て析出した。殊にこの大祭に於て、多少の愉快なる刺戟を吾人が所有するといふことは、最天意のある所である。多少の愉快なる刺戟とは何であるか、これプログラム中にある異教及異派の諸氏の論難である。是等諸氏はみな信者諸氏と同じく、各自の主義主張の為に、世界各地より集り来った真理の友である。恐らく諸氏の論難は、最痛烈辛〔辣〕なものであらう。その癒々鋭利なるほど、癒々公明に我等は之に答へんと欲する。これ大祭開式の辞、最后糟粕の部分である。

一般にある思想、信条を共にする団体、特に「私」の言うように「宗教性」を帯びた集団、しかもマイノリティとしての団体がある集会を持つとすれば、そこには、組織としての結束・親睦・信条の確認とそれをより堅固なものにするための練達、そして必然的に組織拡充のためのオルグ活動、といった目的を内包していたと考えられる。先の引用からは、そのような目的が実際にこの大祭にあったことが窺えるのである。

3

しかしそのような所期の目的は、確かにこの大祭では達成されたのだろうが、ただ「私」一人はその茶番に「愉快な」「幻想」をこわされてしまう。その、「こわれ」た「幻想」が語られたのがこの「ビヂテリアン大祭」である、とまずは言えるだろう。

このように仏教的「殺生戒」に強く根ざしたところの賢治流宗教観から書かれた「ビヂテリアン大祭」であるが、たとえば食物に関して特別の規制のないキリスト教的世界観が色濃く表れた、『ナルニア国物語』にも、肉食に関する禁忌があるのは奇妙な一致と思われる。

For a moment Jill did not realize the full meaning of this. But she did when Scrubb's eyes opened wide with horror and he said:

"So we've been eating a *Talking* stag."

This discovery didn't have exactly the same effect on all of them. Jill, who was new to that world, was sorry for the poor stag and thought it rotten of the giants to have killed him. Scrubb, who had been that world before and had at least one Talking beast as his dear friend, felt horrified; as you might feel about a murder, but Puddleglum, who was Narnian born, was sick and faint, and felt as you would feel if you found you had eaten a baby.(*The Silver Chair: 1953*)

（しばらくは、ジルにはその話のいみがよくわかりませんでした。けれども、それがわかったのは、スクラブの目がおそろしさに丸くなり、こういった時でした。「それじゃ、ぼくたち、ものいうシカの肉を食べてたんじゃないか。」／これがわかっても、三人がみなおなじショックをうけたわけではありません。この世界にはじめてきたジルは、あわれな雄ジカをかわいそうに思い、それを殺した巨人をいやだと思いましたけれど、前にこちらにきたことがあって、ものいうけものたちの少なくとも一ぴきを親友にしたスクラブは、わたしたちが人殺しに感ずるようなおそろしさを感じました。ところが、ナルニア生まれの泥足にがえもんは、気分が悪くなり、気が遠くなって、まるでわたしたちが赤ちゃんを食べてしまったと気がついた時のようなぐあいになりました。[15])

このように、もの言うけものの肉を食べた登場人物たちは、一種カニヴァリズムを体験したような嫌悪感を抱いている。ＣＳルイスによるこの記述は、恐らく次に挙げた聖句からヒントを得たものではないかと推測されるが、先に挙げた賢治の書簡や「ビヂテリアン大祭」の「私」の論難反駁に出てくる「劫」の言説と、その結論に関しては非常によく似通っていることが解る。それは賢治にしろ、ルイスにしろ、動物の擬人化という、児童文学の常套の手法をもって作品を書き続けたとき、結果的に肉食をカニヴァリズムに近いものと思ってしまう、そのような陥穽があるのではないだろうか。それは予言を恐れて生まれ来る子を飲み込み続けたというサトゥルヌス（クロノス）のような、神話の世界だけの話ではない。以下は旧約聖書からの引用である。

それでも、まだわたしの言葉を聞かず、反抗するならば、わたしは激しい怒りをもって立ち向かい、あなたたちの罪に七倍の懲らしめを加える。あなたたちは自分の息子や娘の肉を食べるようになる。（レビ26:27～29）

あなたは敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえに、あなたの神、主が与えられた、あなたの身から生まれた子、息子、娘らの肉さえ食べるようになる。あなたのうちで実に大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた男が、自分の兄弟、愛する妻、生き残った子らに対して物惜しみをし、その中のだれにも自分の子の肉を与えず、残らず食べてしまう。あなたのすべての町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。あなたのうちで大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた淑女で、あまりぜいたくに過ごし、大切に扱われたため、足の裏を地に付けようともしなかった者でさえ、愛する夫や息子、娘に対して物惜しみをし、自分の足の間から出る後産や自分の産んだ子供を、欠乏の極みにひそかに食べる。あなたの町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。（申28:53～57）

イスラエルの王が城壁を上を通って行くと、一人の女が彼に向かって叫んだ。「わが主君、王よ、救ってください。」〈略〉王は更に、「何があったのか」と尋ねると、彼女は言った。「この女がわたしに、『あなたの子供をください。今日その子を食べ、明日はわたしの子供を食べましょう』と言うので、わたしたちはわたしの子供を煮て食べました。しかしその翌日、わたしがこの女に、『あなたの子供をください。その子を食べましょう』と言いますと、この女は自分の子供を隠してしまったのです。」（列王記下６:24～30）
彼らの敵と命を奪おうとする者が彼らを悩ますとき、その悩みと苦しみの中で、わたしは彼らに自分の息子や娘の肉を食らい、また互いに肉を食らうに至らせる。（エレミヤ書19:９）
それゆえ、お前の中で親がその子を食べ、子がその親を食べるようなことが起こる。（エゼキエル書５:10）
主よ、目を留めてよく見てください。／これほど懲らしめられた者がありましょうか。／女がその胎の実を／育てた子を食い物にしているのです。（哀歌２:20）
憐れみ深い女の手が自分の子供を煮炊きした。／わたしの民の娘が打ち砕かれた日／それを自分の食糧としたのだ。（哀歌４:10）

以上、聖書に記載されたカニヴァリズム、特に我が子を食う場面の記述を挙げてみた。これらのほとんどが飢饉の凄まじさを物語るものとして記されているのだが、記述が思いの外多いことに気づかされよう。しかしこのような極限状況における人間の生が問われるような場面は別として、聖書は元から肉食を禁止してはいない。本章の最後に、そもそもキリスト教的世界観では、例えば旧約に定められた細かな「食」に関する規制をどのようにして失って行ったのかを、辿っておく。次はいのちのことば社刊の『新聖書辞典』からの引用である。

・しょくもつ　食物　人類は、創造された最初から、種を持つすべての草と種をもって実を結ぶすべての木が食物として与えられた（創１:29）。しかし堕落以後、人は労苦して食物を得ることを余儀なくされるようになった（創３:17-19）。ノアの洪水後、地の続く限り種蒔きと刈入れはやむことがないとの神の約束が与えられ（創８:22）、ノアが最初にぶどうを栽培した（創９:20）。イスラエル人は遊牧の時代には貧弱かつ簡素な食生活であったが、農耕民として生活するようになると、外敵やききんの脅かしはあっても、食物の質、量共に向上していった。後には外国との交流、宮廷の豪華な食生活などの影響によって、輸入品まで加わってしだいに奢侈なものへと移行した。そのため嗜好も簡素なものから奢侈なものへと変遷した。しかしイスラエル人にはある種の食物は律法によって食べることが禁じられており、これがイスラエル人の食生活を特徴づけている。
１　動物性食品〈略〉獣肉類　古代イスラエルでは動物をほふるのは神前に犠牲をささげるためで、血は必ず祭壇に注がなければならなかった。後に祭儀としてでなく、自分の町囲みのどこででも獣をほふって肉を食べることが許されたが（申12:15、20-22）、一般の人々の肉の消費は多くなかった。獣類をほふるのは客のもてなし（士６:19、Ⅱサム12:４）、祝い事（ルカ15:23）、年ごとの聖所巡礼、家族、親戚の年祭等、特別な時のみであった。しかし富裕な家庭、王宮ではほとんど毎日食されていた（Ⅰ列４:23）。（荒井基）[16]

まず創世記１:８以下で、人が神から与えられた最初の食物は「種を持つ草と種を持つ実をつけ

る木」であり、動物は「あらゆる青草」であったと書かれている。神が肉食を許したのはノア契約以降（創９：１～８）といえる。因みに聖書的にはアダムの造反以降、被造物は虚無に陥り、あざみといばらが生えた状態で、それが終末において神による創造の回復がなされ、「新天新地」が創造されることが預言されている。つまり天地創造の際、すべて「はなはだよく」作られた被造物が、アダムの違反によってともに虚無に服した状態、これが今の世界の状態である。それ故、人類の食生活も、キリスト教では特別な規制はないにしろ、本来の神と人間とが正しい関係にある状態のものではない、暫定的なものということも出来る。

> 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。／子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。／牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。／乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。／わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。（イザ11：６～9a）
> 彼らは家を建てて住み／ぶどうを植えてその実を食べる。／彼らが建てたものに他国人が住むことはなく／彼らが植えたものを他国人が食べることもない。わたしの民の一生は木の一生のようになり／わたしに選ばれた者らは／彼らの手にまさって長らえる。／彼らは無駄に労することなく／生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。／彼らは、その子孫も共に／主に祝福された者の一族となる。／彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え／まだ語りかけている間に、聞き届ける。／狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。（イザ65:21～25）

無論不用意な解釈は保留されねばならないが、例えばここに挙げた終末の預言であるが、「獅子も」「牛も熊も」草を食むようになる、というのである。「ビヂテリアン大祭」にも人間の歯が「混食」に適している云々の件があるが、ライオン（「獅子」）などネコ科の動物は、とても草食には適さない歯の構造をしているのである。先に述べたが、終末においては獣たちは本来の食生活に戻るのであって、ならば人間も草食にもどるのかについての神学的議論は詳らかにしないが、いずれにせよ人間に許された肉食は、ひょっとしたら暫定的な神の配慮である、とも考えられる。

また上田哲氏は菜食主義をキリスト教からみれば異端にあたるグノーシス主義から来ると指摘しているが、パウロは菜食主義者には非常に寛大な奨励をしているので、初代教会においては「異端者」だけではない菜食主義者もいたことがわかる。

> 信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。（ロマ14：１～３）

バークレイは、キリスト教の「大抵どのキリスト者会衆の中にも、特定の律法やタブーを遵守している人たちがいる」[17] と指摘した。それは他の多くのキリスト者からみれば「信仰の弱い人」あるいは「用心深い人」ということになるのだが、パウロはそれに対して寛大であるようにと言っているのである。つまり食に関して特別な規制をもたないキリスト教であっても、そうである

が故にそれが輪廻とかいうような異端的思想と結びつかない限りという条件がつくが、キリスト教は「菜食主義」をも許容しているのである。その意味で賢治の肉食忌避とキリスト教的世界観とは、一部リンクする所もある。賢治のキリスト教理解は、彼にとっての仏教世界と同様、賢治の文脈にとりこまれた〈賢治教〉に変容したものでもある。恐らく賢治はキリスト教のそうした食への寛容な部分を受容して行ったのだろう。それは「ビヂテリアン大祭」本文の、「論難反駁」で展開される「私」のキリスト教理解にて一層明らかになりゆく問題である。[18]

注

1．この物語を童話と捉えていいか、議論の分かれるところでもあろうが、本稿ではひとまず田口昭典氏の「童話としての表現のしかたや、人物のユーモラスなしぐさとか、最後のどんでん返しの場面などが、童話としての片鱗を伝えているのである」（「『ビヂテリアン大祭』食うものと食われるもの」『賢治童話の生と死』1991年３月洋々社）という指摘に従っておく。
2．小沢俊郎「賢治童話事典」（『宮沢賢治必携』1981年３月学燈社）宮澤健太郎「賢治と近代（西洋）文明」（『解釈と鑑賞55－６』1990年６月）田口昭典「『ビヂテリアン大祭』食うものと食われるもの」（前掲）等。
3．上田哲「『ビヂテリアン大祭』考」『宮沢賢治　その理想世界への道程』1985年１月明治書院
4．「２.」に記載。
5．天沢退二郎「収録作品について」『新編銀河鉄道の夜』1989年６月新潮文庫
6．小沢俊郎「つらい『豚』の話」『宮沢賢治論集１』1987年３月有精堂
7．佐野美津男「ビジテリアン大祭」『宮沢賢治の童話を読む』1988年６月辺境社
8．島村輝「『ビヂテリアン大祭』」『解釈と鑑賞58－９』1993年９月
9．志賀直哉「沓掛にて」『中央公論』一九二七年九月。本文は『志賀直哉全集第六巻』1999年５月岩波書店による。
10．村瀬学「食べないといきられないのに　宮沢賢治の潔白性を問う」『思想の科学』1991年２月
11．1918年５月19日保阪嘉内宛書簡。同様な趣旨の書簡に、「私の感情があまり冬のような具合になってしまって燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思って」「肉食をした」ところが「それをきっかけにして脚が悪くなった」「肉食をしたって別段感情が変わるでもありません」（1921年８月11日関徳弥宛）がある。
12．田口昭典「『ビヂテリアン大祭』作品の背景と現代社会に与えるもの」（『解釈と鑑賞』61－11　1996年11月）。但し物語の地名「ニュウファウンドランド島」及び「トリニティの港」は実在するが「ヒルティ」なる「山村」は物語中の登場人物と同様、架空のものである可能性がある。ちなみに*Trinity Bay*のすぐ隣に港*Goose Cove*がある。「グスコーブドリ」を想起し得て興味深い。
13．「２.」と同。
14．「また、現存第一葉右欄外には青鉛筆で、／Vegetarien／Festival／花巻温泉に於て挙行のこと／と書込みがある。」（『新校本宮沢賢治全集第九巻校異篇』1995年６月筑摩書房）
15．『新聖書辞典』（1985年９月いのちのことば社）
16．『銀のいす』瀬田貞二訳　1966年10月　岩波書店
17．W・バークレー著『聖書註解シリーズ８　ローマ』（八田正光訳1970年10月ヨルダン社）
18．これについては別稿「宮沢賢治『ビヂテリアン大祭』論―『こわれ』た『幻想』を語る物語―」（『キリスト教文学研究』30）にて詳述した。